

# 白戸 郁之介（しろと・いくのすけ）

## 1、プロフィール

衆詩派井上康文に知遇を得、詩誌「詩集」の同人となり、詩を発表。アナーキズムに影響された詩集『日本の胎盤』を刊行する。

<生没>

1907(明治 40)年 11 月 24 日 ~ 1945(昭和 20)年 5 月 13 日

<代表作>

『日本の胎盤』

<青森との関わり>

南津軽郡黒石町(現黒石市)に生まれる。「座標」に詩・評論を発表。弘前市で、同人誌「文学ABC」を発行する。

## 2、作家解説

詩人。明治 40 年南津軽郡黒石町(現黒石市)に生まれる。本名鈴木大(まさる)。黒石尋常小学校を経て、弘前中学校に入学。文学芸術を愛好する仲町組の一員となり、弘中短歌会に短歌を出詠、ついで詩作も始める。学業不振のため、大分県中津中学校に転校。昭和3年卒業後、東洋大学に進む。この秋、民衆詩派の一員であった井上康文(詩集社を主宰)を訪問、知遇を得て、詩誌「詩集」の同人となり、同誌に詩を発表。昭和4年7月詩集『日本の胎盤』を詩集社から刊行する。自序で「私の詩は、今こそ、古い生活を古い生活として訣別し、確固とした道程を決定する狼火『日本の胎盤』から焰発する」と自作への自信を記したが、案に相違して、中央詩壇からの反応はなかった。弘前に帰省し、今官一とはかり、須藤均治・木山二郎・井上靖と同人誌を計画、翌5年 12 月「文学ABC」として発行し、短篇小説「感情従来」を掲載。この年文芸総合誌「座標」に詩4編を発表。一戸謙三と詩について論争する。6年「座標」1月号に「十二月詩壇評」を発表。その後、実作から遠ざかり、二度上京し、業界紙記者などを経て、太平洋戦争の

末期頃、坂田二郎の紹介で、同盟通信社に入社し、大湊通信部に勤務する。昭和 20 年 5 月 13 日、結核のため死去。38 歳であった。詩人としての活躍期間は短かったが、詩集『日本の胎盤』は青森県の詩壇において異彩を放っている。

### 3、資料紹介

○『日本の胎盤』

図書

1929(昭和4)年7月15日

195mm×140mm

昭和4年7月15日発行。発行所詩集社。序文井上康文。自序。内容は「村落詩篇」・「豚群の踊り」・「来世紀へ生存する我等のリリカ」・散文詩「けだもの」の詩章と「作品備考」からなり、詩39篇収録。集中の代表作「カムチャツカ行の人夫船」は、社会の暗黒を鋭く告発している。